B 年大斎節第 4 主日　ヨハネ 6 章 4―15 節

［直訳］

1 これらの後、去った　イエスは　ガリラヤのティベリアスの海の向こうへ。
2 さて従っていた　彼に　多くの群衆が、
　というのは　彼らは目撃していた　しるしを
　ところの　彼が行っていた　病んでいる者たちの上に。
3 さて登った　山の中へ　イエスは、
　そして　そこに　彼は座っていた　彼の弟子たちと共に。
4 さて近かった　過越祭が、ユダヤ人たちの祭りが。
5 そこで上げて　目を　イエスは
　そして観て　次のことを、　多くの群衆が　来る　彼に向かって
　言う　フィリポに向かって、
　「どこから　私たちは買おう　パンを、ようにと　食べる　この者たちが。」
6 さてこれを　彼は言っていた　試みつつ　彼を、
　なぜなら彼自身は　知っていた、　何を行おうとしていたかを。
7 答えた　彼に　フィリポは、
　「二百デナリオンの　パンは　十分でない　彼らに
　ようにと　各人が　［ほんの］少し　取る。」
8 言う　彼に　彼の弟子たちのうちの一人が、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、
9 「いる　少年が　ここに　ところの　持っている　五つの大麦のパンと二匹の魚を。
　しかし　これらは　何になるか　これほど多くのために。」
10 言った　イエスは、「あなたたちはさせなさい　人々が　席につくことを。」
　さてあった　多くの草が　その場所に。
　そこで席についた　男たちは　数では　およそ五千。
11 そこで取った　パンを　イエスは
　そして　感謝して　彼は分配した　横たわっている者たちに
　同様に　魚からもまた　ほどの量を　彼らが望んでいた。
12 さて彼らが満たされたとき、彼は言う　彼の弟子たちに、
　「あなたたちは集めなさい　残った　かけらを、ようにと　なにもなくならない。」
13 それで彼らは集めた、そして　彼らはいっぱいにした　十二の籠を
　かけらで　五つの大麦のパンからの　ところの　残った　食べた者たちに。
14 そこで　人々は　見て　彼が行ったところのしるしを
　言っていた　次のことを　「この人は　ある　ほんとうに　世に来るべき預言者で。」
15 そこでイエスは　知って　次のことを
　彼らがしようとしている　来ることを　そして彼を奪うことを
　ようにと　彼らがする　王に、
　退いた　再び　山の中へ　彼　一人が。

［新共同訳］

（1 その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。2 大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。3 イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。）

4 ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。5 イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、6 こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。7 フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。8 弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。9 「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」10 イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおよそ五千人であった。11 さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。12 人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。13 集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。14 そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。15 イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。

①構成

ⓐ 1―2 節

㋐多くの群衆がイエスに従っていたが、それは「彼が行っていたところのしるしを」見たからである。

ⓑ 3―13 節

㋐3―4 節では、出来事の起こった場所と時期とが示される。それは「山」であり、「過越祭が近い」頃だとされている。同じ奇跡を伝える共観福音書では、場所は「人里離れた所」であり、時期は明示されていない。

㋑5―9 節では、イエスと弟子のやり取りが描かれる。イエスは弟子を「試みる」ために、「どこからパンを買おうか」と尋ねると、フィリポは「二百デナリオンのパンは十分ではない」と答え、アンデレも「これらは何になるか」と答え、状況の深刻さが強調される。

㋒10―11 節では、イエスが「席につき、横たわっている者」に「彼らが望んでいたほどの量」のパンと魚を分配する。

㋓12―13 節では、人々が「満たされた」後、パンの残りを集めると、十二籠にもなったことが述べられる。

ⓒ 14―15 節

㋐この段落は「彼が行ったところのしるし」によって、1―2 節と対応している。その間の 3―13 節では、イエスの行った奇跡（しるし）が物語られる。しかし、この奇跡はそれを利用して

自分の思いを達成しようとする人たちにとっては、誤解の種にしかならない。

②イエスに従う群衆（1―2 節）

ⓐイエスは、エルサレムでの祭りを後にして、ガリラヤへと戻る。5 章の祭りが何の祭りであるかは特定されていない。多くの群衆がイエスに「従っていた」とあるが、この「従っていた」は過去の動作の継続を表す動詞形で書かれている。群衆はイエスにずっと従い続けていたのであり、その理由は「彼が行っていたしるし（複数形）を目撃していた」からである。祭りのときイエスが行った「しるし」を見て、群衆のイエスへの期待はいっそう盛り上がる。そのような中で、さらに大きなしるしが行われる。

ⓑ「目撃していた」はセオーレオーの未完了過去形である。この動詞の意味合いは、「（多くの場合、普通ではない事柄を）注意しながらずっと見る・観察する」である。この動詞は 2 章 23 節でも使われ、イエスが行ったしるしを「見た」人々の興奮がイエスに拒絶されたことを述べている。「そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。人々の興奮は底の浅い、誤解を含んだものにすぎない。彼らは「注意しながらずっと見ている」のに、イエスの姿を見誤っている。結びにも、「人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた」とある。

③イエスの与えるパン（3―13 節）

ⓐこのしるしは「山」で行われる。この「山」は冠詞のついた「山」だから、誰もが知っている「あの山」であって、重要な出来事の起こる場所である。32 節でモーセに言及していることから考えると、旧約聖書のシナイ山と比肩できるような「あの山」である。

ⓑパンの奇跡（しるし）は四つの福音書すべてに記されているが、ヨハネだけがそれを過越祭に関連づけている。この過越祭は、ヨハネに登場する三回の過越祭のうち、二回目にあたる。2 章 11 節以下の最初の過越祭では、宮清めの出来事を通して、イエスはイスラエルが待望するメシアであり、礼拝すべき方であることが述べられる。11 章 55 節以下の三回目の過越祭は、イエスの受難の時であり（一三 1）、イエスがイスラエルのために献げられる過越の小羊として屠られたことが述べられる。

ⓒヨハネがくり返し過越祭に言及し、祭りでのイエスの働きを語るのは、そのことのうちに神の救いの業を見るからである。ヨハネでは、イエスがイスラエルの祝祭の中心である。出エジプトに示された神の救いの業を記念するためにユダヤ人がエルサレム神殿で祝う過越祭を、ヨハネはまことの神殿であるイエスを通して祝う（二 19 以下）。

ⓓヨハネがパンのしるしを過越祭に結びつけたのも、過越祭の意味に基づいて、パンのしるしの意味を示すためである。死から命への過越をイスラエルにもたらすのは、「命のパン」としてのイエスである。だが、こうしたしるしの意味を、パンに満腹するだけの群衆も（14・15・26 節）、ユダヤ人たちも（41 節以下）、多くの弟子たちも悟ることができない（60 節以下）。

ⓔ2 節がすでにイエスに従う「多くの群衆」を述べていたが、その「多くの群衆」がイエスのもとに押しかけて来る（5 節）。それを見たイエスはフィリポを「試みつつ」どこからパンを買うべきかと問いかける。この「試み」は意地の悪い試験ではない。イエスは弟子がどのような人間であるか熟知しているから、試みて知る必要はない。試みるのは弟子たちのためであり、彼らにとっては信仰を表明する格好の機会となる。

ⓕ7―9節で弟子が答える。フィリポは二百デナリオン（労働者二百日分の賃金）のパンでも十分ではないと答える。また、五つのパンと二匹の魚を持った少年に気づいたアンデレは、この程度では何の足しにもならないと答える。弟子たちの目に映った現状は、パンを配る手だてを持たない絶望でしかない。

ⓖ10―11節ではイエスの行うしるしが述べられる。10節の「席につく」と11節の「横たわっている」は、いずれも「食卓につく」を意味する言葉であるから、この場が一種の食事の席と見られている。この食事は五千人もの群衆が満腹する食事であるから、パンが増えたのは明らかだが、それをほのめかす描写はどこにもない。

ⓗヨハネの興味はパンの増加にはない。むしろ10節の「草（コルトス）」に注目すべきだろう。草が「多かった」と述べるのはヨハネのみである（マコ六39は「青草の上に座る」、マタ一四19は「草の上に座る」、ルカは草には触れていない）。この「草」は詩編23編やエゼキエル34章が述べる「青草」を思い起こさせる。神が民を「青草」の茂る牧場に導き、彼らを豊かに養うと歌われていたように、イエスはまことの牧者として民を導き、彼らを養う。その食事の豊かさは、「なくならないようにと」集めたパンの残りが十二籠になったことにはっきりと表されている。

④群衆の誤解（14―15節）

ⓐこの大きなしるしを見た人々は、イエスを「奪って」王にしようとする。群衆がしるしの中に見たのは、彼らを導き養うまことの牧者ではなく、彼らの願いを満たすために利用したい王である。彼らが求めた「預言者」は彼らの願いを満たしてくれる預言者であって、神の言葉に耳を開き、その指導に身を任せるための預言者ではない。群衆は自分の考えに従ってしるしを捉え、イエスを王に仕立て、利用しようとする。そのような群衆からイエスは離れ、「山の中へ」退く。

⑤しるしの向こうに神の力を見る

ⓐマルコ福音書では、群衆はあらゆる困難を顧みずにイエスのもとに走り、イエスはその群衆を見て深く憐れんで教え始める。ヨハネでも群衆はイエスについて来るが、ヨハネの描くイエスは群衆をそのまま温かく迎えるイエスではなく、群衆の無責任さを知っているイエスである。しかし、群衆の本音を知っていても、イエスは群衆のためにパンの奇跡を起こし、群衆が「望んでいたほどの量」を与える。

ⓑヨハネはイエスの奇跡を「しるし」という言葉で表す。イエスの奇跡は、その不思議な出来事の向こうに神の力が働いていることを示す「しるし」である。しかし、人の目はその起こった出来事にだけ向かい、神の力を見ることができない。

ⓒ「しるし」はそれが指し示すものを正確に見て取るときに意味あるものとなる。群衆は「しるし」を見間違い、「イエスを王にするために連れて行こう」としている。それを察知したイエスは「ひとりでまた山に退かれた」。結局のところ、群衆はイエスを利用して自分たちの願いを満たそうとしている。イエスは裏切られると知っていても、パンを増やす。しるしが指し示すものへと人が目を向ける可能性を信じているからである。

ⓓヨハネが描く最大の「しるし」は「イエスの十字架と復活」である。イエスを理解できず、拒絶する人々はイエスを十字架へと追いやる。しかし、その十字架は苦しむイエスと共に神がいることを現す「しるし」となる。イエスの十字架と復活は神がその力を現す栄光の時である。イエスはパンのしるしを見て取ることのできなかった人々のためにも、十字架に上っていく。